



ツタに絡まったパイプを協力して引き抜く。

島をあげての海岸清掃と

雇用創出に向けた新たな取り組み

〔新潟県粟島〕

四年ぶりのクリーンアップ作戦

令和四年六月一九日(日)午前九時、新潟県粟島浦村と村上市を結ぶ高速船「さらら」から多くの乗客が島に降り立った。彼らの目的は、この日に行なわれる「第一五回粟島クリーンアップ作戦」への参加である。同作戦は、島内外からの参加者が一体となって、島の海岸に漂着したゴミを回収する村をあげての一大イベントだ。

日本海に位置する粟島には、対馬海流と冬の強い季節風の影響で多くのゴミが漂流・漂着しており、かねてからこの回収・処理が課題となっていた。そこで、島では実行委員会を立ち上げ平成二〇年よりクリーンアップ作戦を実施、海ゴミ問題の解消と交流人口の創

本誌編集部

出に取り組んできているが、悪天候や新型コロナウイルス感染拡大の影響などでここ数年は中止が続いていた。同三〇年以來、四年ぶりの実施となった今回の開会式の挨拶では、本保健男村長(当時)が久しぶりの開催を祝すとともに、参加者一同に対して感謝の意を述べた。

式典終了後、参加者は徒歩で清掃場所へと移動する。クリーンアップを行なう海岸は年ごとに異なっており、今回は島の東側の内浦地区の「茂崎海岸」と「正ノ宮海岸」の二カ所。前者は前回に引き続き、後者は平成二五年以來の清掃である。両海岸とも長い期間、清掃から遠ざかっていたためか、かなりの量のゴミが落ちていた。

島内から四一名、島外から九四名、計



休憩中のひと時。

一三五名の参加者たちは、軍手を着け、支給されたビニール袋にゴミを入れていく。ペットボトルなど日常的に目にするゴミだけでなく、浮子やコンテナ、ロープなど水産関係のゴミが多くを占めた。アナゴ漁で使う筒など、海外から漂着したと思われるものも見られた。サイズの大きなゴミもあり、茂崎海岸で回収されたプラスチック製パイプは、

二〇メートルほどの長さがあった。ケーブルをカバーしていたものと思われるこのパイプは、海岸のツタ植物に絡まっていたためなかなか引き抜くことができず、参加者と事務局スタッフ数人が悪戦苦闘の末にやっと回収することができた。

海岸美化に留まらないイベントの成果

この日の天候は曇り、最高気温は二七度だったが、体を動かしているとたちまち暑くなってくる。防塵や感染症対策のためマスクを着用しているとなおさらである。清掃中は、三〇分ごとにスタッフが呼びかけ、水分補給を促す休憩時間が設けられた。また、粟島へき地出張診療所の看護師二名が救急車とともに待機するなどの安全対策が図られるなど、常駐の医師がいない粟島（本誌二六七号参照）における、看護師の担う役割の多様性を垣間見ることもできた。これらの対策が功を奏し、大き

く体調を崩した方はいなかったという。

今回は一時間半ほどの活動で、合計六・一トンものゴミが回収された。海岸に残ったのは、流木など自然の漂着物だけである。清掃は定期的に行なわなければ、綺麗な海岸を保つことはできない。その点、リピーターも多く、島の恒例行事として根付いているクリーンアップ作戦の果たす役割は大きい。

清掃を終えた参加者たちは、大きな達成感と程よい疲労感に包まれる。一緒に汗を流して作業したからか、休憩時間中や集落への帰路には、住民同士はもちろん、初めて会う参加者同士での会話が自然と生まれていた。漂着ゴミの回収に加え、こうした人と人とのつながりの創出も、本イベントの大きな成果だろう。島外からの参加者に対する船の運賃支援や、島唯一の入浴施設「おと姫の湯」の入湯が無料になるなど、さまざまな特典も魅力的ではあるが、それ以上に海岸清掃を終えた充



粟島浦地域づくり協同組合の職員派遣を予定する「ばっけ屋」。

実感や島内外の方々とのふれあい、島の穏やかな空気が、また参加したいと思わせるのである。参加者からは、早くも来年の開催を待ち望む声が聞かれていた。

県内初の特定地域づくり事業協同組合
粟島浦村では、令和三年九月六日に

神丸正広粟島汽船取締役を代表理事として、「粟島浦地域づくり協同組合」が設立され、同一〇月に総務省の「特定地域づくり事業協同組合」に新潟県内で初めて認定された。

粟島浦地域づくり協同組合の事務局を担う町田純一さんによると、今年三月に島に、以前から暮らしている住民二名を正職員として雇用。現在、島の水産会社「粟島定置」に派遣している。二人は、「粟島定置」で三〜七月にかけて、マダイやブリなどを漁獲する大謀網の作業に従事する。さらに、粟島観光協会直売所「ばっけ屋」でアマダイなどの干物の加工に携わる予定だ。町田さんは「今は島に馴染みのある人を雇っているが、将来的には地域おこし協力隊員の任期終了後の受け皿にもなれば」と展望を語った。同組合には、粟島汽船や粟島浦村社会福祉協議会からも職員の派遣依頼が来ているとのこと。今後の展開を注視していきたい。



大豆畑の前に抱負を語る松浦拓也粟島観光協会事務局長。

芽吹き始めた大豆ブランド化

島の北部にある丘陵地「まきだいら牧平地区」には、総面積約一三〇〇坪の大豆畑が広がる。粟島観光協会事務局長の松浦拓也さんによると、この畑では観光協会とスナック菓子などを製造するカルビー（株）が共同で、在来大豆「ひとり一人娘」を栽培している。新潟と長野県の

限られた地域でしか栽培されていないこの品種は、愛娘のように大事に育てられてきたことが名前の由来で、この時は、ちょうど芽が出始めたところだった。

この大豆を原料として、豆スナック菓子「nino」のハイブランド商品を開発し、カルビーの会員向けECサイト限定で販売する計画で、より品質の良い豆を収穫するべく、社員が数カ月に一度粟島を訪れ、土寄せや摘心といった栽培管理を行なっているという。観光協会の職員は、草刈りなど日常の手入れを担う。このほか、「しおかぜ留学生（島外から離島留学し、粟島浦小中学校に通う児童・生徒。本誌二七〇号参照）」が農作業を手伝うこともあるとのこと。また畑では、彼らが馬の世話をしている「あわしま牧場」からの馬フンと、竹チップなどをブレンドしたオリジナルの肥料が使われている。

松浦事務局長は「島では、以前から

この大豆を使って煎り豆や味噌などの製造販売を進めている。新スナック菓子の販売を、粟島と大豆の知名度向上につなげたい」と話す。またアグリツーリズムとしての展開も考えており、

今年一月には収穫体験会も実施予定だという。本保村長も「山口県萩市の『相島スイカ』のようにブランド化していきたい」と期待を寄せる。

午後三時、島外からのクリーンアップの参加者たちが帰路の船に乗り、港には、感謝とまたの来島を願う想いを込め、まるで家族や友人を送り出すかのように、大漁旗を携えて見送る住民の皆さんの



大漁旗が掲げられた盛大なお見送り。

姿が見える。「関係・交流人口」という文字だけでは伝わらない、粟島のためにも汗を流したからこそ得られる、島との肌感覚なつながりがそこにはあった。

(石川)